雪の北国から

渡辺淳一

雪の北国から

渡辺淳一

中央公論社

雪の北国から

©一九七六

昭和五十一年七月七日初版発行
昭和五十一年七月三十日再版発行

著者　渡辺淳一

発行者　高梨茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-一-一
電話五六一-五九二一
振替東京二-三四

検印廃止

目次

医学と文学
医者から作家へ　9
医学と文学　13
貧しい患者は誰を頼ればいいのか　18
無医村をどうするか　31
「医は仁術」　37
心臓移植・和田外科の内幕　41
私のなかの女性
私のなかの女性　65
男のなかの女　女のなかの男　73

あなたのなかの悪女へ　84
心中物　94
雪のなかの日々
雪のなかの日々　101
血と小水と　109
父のこと　117
歌と彼女たち　123
幻の国体選手　126
読書遍歴　129
倉島齊と『くりま』　133
ただ一つの取柄　137
作家の職業病　140
フケと遊ぶ　143

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

外国で書く小説 145
作家の信用度 148
失見当識 150
酔いを操る 154
男性天国 157
時すでに遅し 161

私の美幾女

強運の人 寺内正毅 167
『花埋み』ノート 175
私の美幾女 202
虚構の多い〝偉人伝説〟 207
奇々怪々の北方領海 211

北への旅

ポプラと平原 233
生活者と旅人 236
さい果て行 243
襟裳岬 246
残酷の美しさ 253
あとがき 259

装幀 原万千子
口絵写真 清水寛

雪の北国から

医学と文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

医者から作家へ

「なぜ、医者から作家になったのですか」と、よくきかれる。男が人生の途中で職業を変えた理由ともなると、なかなか一口でいえるものではない。

「よくわからないけど、気がついたら作家になっていた」と答えるのが、一番当っているような気がするが、こんな漠然とした答えでは、たずねたご当人は納得できないらしい。「そんなものですかねえ」と、気の抜けた顔をされる。

大体、私は若い時から、あまり文学青年ではなかった。中学の先生の影響で俳句や短歌をつくったことはあるが、いま読み返してみてもかなりひどいものである。

文壇には、藤枝静男氏、北杜夫氏、なだいなだ氏、加賀乙彦氏など、医者から作家になられた方が少なくない。このなかでは、藤枝氏を除いてはいずれも精神科の出身である。

これはどういうわけなのか、私が考えるに、前記の方達はいずれも文学青年であったのではな

いだろうか。若くして文学的才能に恵まれていたのが、なにかの事情で医者になった。それで、医学のなかでは最も文科系に近い精神科を選ばれた。そう考えるのは間違いだろうか。

これに反して、というと少し大袈裟だが、私は殺風景な外科の出身である。精神科は興味はあったが、それを専攻する気はなかった。精神科はたしかに医学の一分野ではあるが、自然科学という領域の学問としてはいささか疑問があった。

このあたりのことは話せば長くなるし、多少専門的にもなる。いろいろ異論もあるところだから、そう思った、というだけに止めておく。

とにかく、私は外科にいったが、おかげで、若い時から、外傷の第一線である炭鉱病院によく行かされた。

ここでは落盤事故があり、私の受け持った患者が何人か死んでいった。

一度、釧路の北のYという炭鉱で落盤事故があり、肋骨が折れて肺臓にささり込み、外傷性気胸を起した患者さんが運ばれてきた。この怪我は本来は胸部外科の専門だが、炭鉱病院にただ一人の外科医であった私は、その患者さんも診なければならなかった。

当時の私は、インターンを終って間もなくで、正直いって、どうしていいのかわからなかった。顔面蒼白で呼吸困難の患者さんに、ただ酸素吸入と点滴をするぐらいのことしかできなかった。結局、この人は翌日、奥さんと二人の子供を残して亡くなった。

私はその人のお通夜に行ったが、やや斜め向きの遺影が、私の未熟さを責めているようで、い

たたまれなかった。

ところが、その一年半後、今度はKという炭鉱に出張した時、やはり同じようなケースの患者さんにぶつかった。三十半ばで、奥さんと子供さんが二人いるところも、先の患者さんと同じだった。

幸い、この時、私はいささかベテランになり、外傷性気胸に対する応急処置を覚えていたので、なんとか手術で助けることができた。

患者さんは喜んで、退院する時、ウイスキーの角瓶を一本持ってきてくれた。私はそれを飲みながら、前の人と後の人の、運命の違いを考えた。

もし、私がいまの技術で、先の炭鉱病院に行っていたら、前の人は死ななくて済んだのではないか。前の人と後の人と、逆になっていたら、運命はまったく違ったものになったろう。それは本人だけでなく、奥さんや子供、さらには親戚から知人達の運命まで、大きく変ったに違いない。——ふとしたことが、人々の運命を変えている。

私はなにやら、自分がとてつもない、大層な位置にいるような気がした。二十五、六歳の、たいした技術もない若造が、医者だというだけで人々の運命を握っている。運命の岐路の、キャスティングボートを握っている。それを思うだけで、身が引きしまり、一方でそれがひどく無気味で怖ろしいことに思えた。

後年、私が直木賞をもらった「光と影」は、ふとしたカルテの置き違えで、運命を岐けた二人

の軍人のことを書いたのだが、その時の無気味さが土台となっていたことはたしかである。

とにかく、私は医者なるがゆえに、たくさんの人々のなんの虚飾もない、生きざまと死にざまを見ることができた。人間が生に対してはことごとくエゴイストで、死が見事に他愛なく、無であることも知った。どんな人も業績も、死によって確実に風化されていく。

人間は死んではいけない。だが死は避けられない。死は掌に残った一握りの灰にすぎないが、それゆえに生きているかぎりは精一杯生きなければならない。

それも本当は無駄なことではあるけれど、いっとき死のあとの果てしない虚しさから、目をそらしてくれるほどの効果はある。

やっぱりうまくいえないが、私が小説を書こうと思いはじめたのは、そのあたりのことからである。

医学と文学

「医者と、作家と、仕事の内容はずいぶん違うんじゃありませんか」と、同情とも慰めともつかない質問をよく受ける。

たしかに私自身も医学部に入ったころは、医学と文学はかなりかけ離れたものだと思っていた。実際、この両者は、形容詞の形で、「医学的」、「文学的」というように表わすと、かなり離れた感じになる。

しかし医学部を卒え、医局に入り、臨床に慣れ親しむにつれ、この両者は相反するどころか、かなり近いものだと思いはじめるようになってきた。

昔の医学者には、詩人とか画家、哲学者などを兼ねている人が多かった。スペシャリストが要求される現在では、これと同じ条件ということは云えないだろうが、このことは医学と文学が発想の原点において、かなり似ていることを暗示しているように思われる。

実際、医学も文学も本質的に「人間とは何か」という問いかけから発しており、この点ではまさに同じだということができそうだ。ただ医学で求める場合は肉体的な面から、文学で求める場合は精神的な面からと、そのアプローチの仕方では、かなりの開きがある。しかし最終的に追い求めていくのは「人間」であるから、そう違うものではない。

その意味から文学と医学と両方から人間を見ることはマイナスではない。場合によっては、人間を多面的に見られるという利点もある。

これまでの文学作品では、人間の本質に迫る作業において、感性の世界からのアプローチが主だったが、精神・肉体両面からのアプローチを、文学の上で合致させられないものだろうか。

幸い私には、肉体的な面から人間を見てきたという経験がある。この点では他の作家より、少しはましかもしれない。だから感性の世界でとらえてきたものを肉体的な面から裏打ちする、この二つの作業が表裏一体をなして、人間という実体へ迫れれば、新しい視点の小説を書けるかもしれない。

ともかく、医学と文学はアプローチの仕方は違え、目的とするところは同じであり、この両者を追い求めることは意外に近い作業だということができそうだ。

医学と文学に共通するもう一つのことは、両方ともロマンである、ということである。

近代文学は十八世紀から十九世紀の初頭にかけて、ロマンチシズムの抬頭により以前の古典主

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com